

山ぶどうのひとり言

小柴芳夫さん（昭和3年生 三島町）

爺や 爺や

俺、学校なんか出てねえから

俺、これからしゃべっから、字さ書いてくんつえ

爺…まで まで 今、鉛筆と紙持ってくつから

そんじゃ、字に書くから、しゃべってみろ。

俺は奥山で育った山ぶどうの木だ

年はなんぼになったかわかんねえが、いつのまにか背はのびた

俺んどこさ遊びに来るのは木ネズミだ

登ったり下ったりして遊んで帰って行く

今年も白い栗の花がいつぱえ咲いた

栗の木にからまりながらきれいな花を見ていたら

町から来た爺さまが俺を引っぱり下ろした

「おめえ達、こんな山ん中にいねえで、町さあいべ。

町の人たちはおめえ達の来るのを待ってんぞ」

爺さまは俺を町さ連れてきた

爺さまの仕事場にはでっけえ籠がいつぱえある。

いろいろな長さに皮を切って揃えと

中には、みじけえのも出る

爺さまはそれをぶん投げねえで

俺みてえなちいせえ籠を作る

爺さまのどこさ来るおがぁ達が

「めげえな、めげえな」と俺を取り上げて撫でてくれる

あの山の中にいた俺が

なんだかきれえな籠に生まれ変わって

町の人にめごがられるなんて思いもしなかった

爺さま ありがとうな

でも、俺んどこさ遊びに来てた木ネズミは

今も達者でいんだべかなあ

小柴芳夫

この詩は、小柴さんの思いと共に、彼の小さなブドウヅル作品に添えられている。

山ぶどうのつぶやきに惹かれ、小柴芳夫さんを訪ねた。



自分のできる範囲で、手元にあるものを工夫して、次から次に新しい挑戦をするのが芳夫さんだ。

工房「泉」と名付けた小屋からは、たくさんの面白い良いものと、素材の物語が湧き出てくる。

かつては三島町の桐を使った木工から始まり、山ぶどうの籠やバッグを作っていた。

現在は材料採取に山に入るのが難しくなったこともあり、山ぶどうで作っていた小さな籠を、紙テープを使って作っている。

「キレイなものではなくて、多少ズッコケたような、“素朴な作品”を見抜ける感性を育てろ」。

皺がいつぱい入った武骨な手で、小さな籠を優しく撫でながら微笑む芳夫さんに諭された。



たくさんの工人さんが山ぶどうの籠を競って作るようになる頃、芳夫さんが気になっていたのは、端材を捨てたゴミ箱。

現在では山ぶどうの素材が採れなくなっているが、かつて山に入ればどこでも山ぶどうが採れた頃、籠を作るために丈夫で撓(しな)りの効く良い部分以外はすべて捨てられてしまっていたそうだ。

「なんだか声が聞こえる。寂しいような…可哀そうなような…」。

芳夫さんには、山から降ろされて、なんの用もなさずに捨てられていく山ぶどうの声が伝わってきた。

その端材を使って作り始めたのが、この小さな籠だ。

山ぶどうのひとり言は、芳夫さんに届いた山ぶどうからのメッセージ。

「どんな機嫌だ？どっちさ行くだ？」。

素材を触って感じたり、考えたりするのは飽きない。

素材が折れたりすると、自分を怒る。

常に手元の材料との対話。声なき相手との対話。

相手は土と水と空気の中で奔放に育った自然素材。

思ったようには曲がらないし、言うことを聞いてくれる訳ではない。

どんなに作為的に操ろうとしても、決して屈しない“素直さ”が相手だ。



「手を動かすことが楽しい。こしらっているのが楽しい」。

ものづくりがヨッパになる(会津の方言で「飽きる」と、ふらりと畑へ繰り出す。

ものづくりも畑(野菜)も同じ。

向き合っているものが何を語りかけているのか耳を傾け、丁寧に感じることに。

時に従ったり、流されたり、協力してみたり、大切に、大切に温めて育ててあげれば、それはきっと、どこかで誰かに愛される。

